



day of day, s

森 麗彩

荒涼とした茶色い大地に岩肌を剥き出しにした歪な岩が幾つも隆起し並び立っている。時折吹き荒れる強風が岩肌を擦り、掠れた音を大気に響かせていく。その中心を舗装された道路が一本、突き抜けるように直進していた。

青年は潰れたリュックサックを肩に担ぎ、道路に沿ってその路肩を歩いている。

歩き始めてどれ位の月日が流れただろうか。不変の光景の中で、太陽と月が交互に入れ替わり、時間だけが流れていった。

何処かの街の何処かの建物の一室で青年は目を覚ました。煤けた灰色のコンクリートの天井が視界に拡がり、横から照射される陽光がコンクリートの黒ずんだ模様を一層際立たせる。容赦なく射し込む光を手で遮りながら、青年は横たえていた上半身をゆっくりと起こす。身に着けている新品のようにまっさらな衣服とシューズの感触を体全体で感じ、次いで鉄パイプで組まれたベッドの硬いバネがぎこちない耳障りな音を立てて軋むのを真下に感じながら、彼は確認するように辺りを見回した。

無機質なコンクリートで囲われた六畳程の小さな部屋には家具家電の類が一通り窮屈そうに並んではいたが、それらが使われていた様な形跡は無く、生活感の欠片も感じられない。

ただ一つ。青年はそんな小さな部屋の冷蔵庫の隅に不自然に置かれたリュックサックを目にした。

青年がいた部屋は五階建てのビルの一室で、そのビルは都市として括られる建造物群の一つに過ぎなかった。住宅があり、商店があり、公園があり、植物があり、空があって、太陽が痛いくらいに輝きを放ち、雲が風に乗って流れているのに、彼以外の誰の存在も認める事は出来なかった。

青年は朝から晩まで幾日も自分以外の誰かを求めて都市の中を探し回った。

が、次第に疲れて、お腹が減って、眠くなって諦めて、自分が目覚めた場所に戻ってきた。

途端に強烈な睡魔が襲い掛かり、青年の意識を直ぐにでも何処かに消し去ろうとしてくるが、それ以上の空腹感がどうにか意識を保たせ、しがみつく様にして冷蔵庫へと縋り付く。渾身の力を込めて開いた冷蔵庫ではあったが、しかし、その中はカラッポで白い空間が視界を埋め尽くしただけだった。

そこで気力は途絶えた。体中から力が抜け、重力に思い切り引っ張られた体が床に叩き付けられ、それと同時に意識も消し飛んだ。

倒れ込んだ体がリュックサックに当たり、その拍子に中から零れ落ちた幾つもの缶詰がゴロゴロと床に転がった。

青年には『他人』という概念があった。自分以外の自分と似たような存在がいるという認識。

幾日も眠り込んで目覚めたある朝に、青年はその『他人』を捜す旅に出ようと思った。

リュックサックを肩に担ぎ、既に薄汚れてしまった衣服の汚れを軽く手で払うと、この街を後にした。

いつか目覚めた日よりも強く眩しい太陽の光が東の空から降り注ぎ、周囲の色を際立たせる。  
道は一本。二車線の道路が延々と直進していた。  
その先に導くように。

ただ歩き進むだけの毎日の中で巡らすまだ見ぬ他者との出会いは、いつしか青年の中で単なる『人捜し』から『共に存在を認め合える者を捜し求める旅』へと徐々に目的を変化させていった。

互いが互いの存在を認め合う事の出来る存在。意見を言い合える存在。頼られる存在。頼る存在。共に協力し合える存在。

お前はここに居てもいいのだと言ってくれる存在。

その思いが彼の足を前へと動かしていく。

空腹がおとずれて、青年がリュックサックを逆さにして振ると、小さな缶詰が二缶。道路に落ちて、銀色のアルミの音を発した。

食料はこれで全部。

青年はそれを見つめて溜め息をついた。

どんなに切り詰めて食事をしても、無くなるものは無くなる。

青年は路上に転がった缶詰を拾い上げると、リュックサックに仕舞い込んで、また歩き出した。

中身が無くなり、ぺちゃんこに潰れてしまったリュックサックを背負い、青年は歩いていた。空腹には慣れてしまったが、それでも時折襲ってくる目眩はどうにもならない。

急に目の前が暗くなり、青年は倒れ込んだ。

どうにか持ち堪えた意識がくぐもった声を上げさせながら、両手で上体を起こす。転倒のせいか、空腹のせいか、ぼやけた視界の先に——直進する道路の遥か遠方に——高くそびえるビルの尖頭が見えた。